
D r a g o n B l a d e - 蒼の月 -

D

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

Dragon Blade - 蒼の月 -

【Nコード】

N1640A

【作者名】

D

【あらすじ】

愛するバイクに跨り、身の丈ほどもある巨大な剣を背に旅する少年がいた。似てない双子の少女と共に旅をし、摩訶不思議な力をもつ『魔導具』を求め訪れた辺境の小国。そこには残酷な過去の追憶が眠っていた。

Prologue

「やめろおおお！」

銀の軌跡が幼い少年に振り下ろされる刹那、脇から飛び出した剣がその刃を受け止め甲高い悲鳴のような切磋音と青白い火花が散った。

居間と思しき部屋。

幼子が見れば魔物の巣窟と錯覚するかも知れない。

灯籠で茜色に染まりたつた一部屋に幾人もの人影が壁に躍り、化物の群れの如く映っていた。

小さな窓から高い所で無責任に彼らを覗く蒼く輝く満月のように、少年は澄んだ蒼い瞳を驚愕に見開き丸くして頭上で重なり合い拮抗している鋼鉄の刃を凝視していた。恐怖で身が竦み声すら出ない。「フンッ、子の命が惜しいか、なら初めから出せばいいものを！ さあどこだ、どこに隠している！」

「責様なんぞに………渡せるものか！」

「ぬ！」

襲撃者の剣は弾かれた。

少年の父は細身であるものの思いがけない剛力を発揮し、鬼のように大柄な体格をした男の剣を返したのだ。

だが

「あ、あなた………！」

鎮痛な叫び。

悲鳴は届けど母親は背中から別の輩に斬られ崩れるように倒れた。それでも腕には幼い少女を庇うようにしっかりと抱いていた。

「おかあさん!?」

「!」

少女は自分に覆い被さる母を呼ぶが応えない。それに気を取られる父。

すかさず目の前の男が斬撃を繰り出したのが見えていなかった。

「ぐ、ぐわああ!」

父の手から剣が零れ落ちた。

無残にも肩から袈裟切りされ、鮮血と共に倒れ伏す。

少年の雪のように白い肌に生温かい血がはねたが、それでも動けなかった。夢でも見ているかのように呆然と倒れた父を見ていた。

「あつた、ありましたぜ!」

「早くよこせ!」

それはたつた一振りの剣。

鋼鉄製の無骨な造りで、刃には印が彫られている。しかしその巨大さが異常だった。少年の背丈二つぶんはありそうだった。

剣は部屋の片隅に置かれた神像の裏に隠されていたもので、それを手にすると男は舐めるように品定め、恍惚に顔を歪めた。

「ククク……よし、ずらかるぞ」

「このガキどもはどうします?」

手下に促され男はちらりと茫然と立ち尽くす少年と、勇敢にも睨みつけてくる少女の双子を見た。

すると少年のほうに注目し醜く顔を歪める。

「……ほう、よく見りゃ綺麗な顔をしてやがる、売り飛ばすか」

「!?!」

少年は男の黒々と淀んだ瞳に見入られビクツと身を震わせた。少女は眼を閉じて必死に神に祈る。

「いや、放っておけ。そんなチンケな金なんか要らなくなる。

この剣があればな……いくぞ!」

騒々しさが嵐のように過ぎ去ると静寂が戻ってくる。

もう少年たちに興味をなくした一味はぞろぞろとその場を後に去り、すると恐怖も去ってか少年はやっと身体の内を戻し、思い出したように父親に駆け寄った。

「父さん！」

呼びかけには応えない。

もうすでに父は魂を宿してはいなかった。

「………復讐してやる」

少年は震えていた。

「いつか………必ず………！」

血で濡れた手で落ちていた剣を拾い、ただ月に咆えた。

第一章【辺境の国】

爆音が青空の平野に響き渡る。

鈍色の鋼鉄の塊が二人の人間を乗せ風を切って爆走している。車輪は丈夫なバナナ状の部品と連結しているので、舗装もされていない悪路でも転倒などすることなく大地を蹂躪していった。

「チイツ、最近エンジンの調子が悪りいな……」
「なんか言ったー!？」

鋼鉄の塊 バイクを運転しているのは少年。

身の丈もある大型の剣を背に、黒の革製防護服レザーーツに身を包みゴーグルをした少年の呟きに、後部に乗っている白い聖外套ホーリーローブをはためかせている少女は、この速度に慣れないのか落ち着かない様子で叫んで返した。あまりの速度で声が風に流される。

「ほら、見えてきたぜ」

そう言う少年に促され少女は前方に眼を凝らす。すると平野の向こうに石造りの堅牢な街壁が見えてきていた。目的の場所に到着し、ようやくこの超速度から解放されると少女は胸を撫で下ろす。しかし。

「よし、飛ばすぜ!」

「ちよー!」

魔獣が唸っているような爆音が激しくなる。

そのさらなる加速に声も景色も彼方に流れていった。

「うっ、もうイヤ……」

やっと大地に足が着き安堵した少女。

だが酔ってしまったのか顔色がひどく、横で少年が心配そうな振

りをしながら顔で笑っていた。

「いい加減慣れるよな、サイ」

「うるさいキリヤ、アンタが異常なの！ うっ」

少年はゴーグルを外すと、短く切り揃えられた錆がかった鉄のよ
うな灰色の髪を振り払った。

その肌は雪のように白く、眩しげに天を見上げた瞳は空よりも蒼
細い輪郭をしていて美しい顔立ちは少女のようにも見える。

そして苦しげにうづくまる少女。

漆で塗られたような美しい黒髪は長く、少年と同じ深海の如く蒼
い瞳が唯一の共通点であり、顔の造りは幼さに負けない愛らしさを
湛えているのだが少年の美しさには見劣りしてしまうようだった。

そんな二人は街門の少し離れたところに死角になる丘を見つけバ
イクを停め降りていた。

埒があかないので少女 サイの回復を待つことにし、その間キ
リヤは愛するバイクの点検を始めた。

「うーんやっぱオイルかな……」

サイのことなどすっかり忘れ、キリヤはバイクに夢中になってい
た。

なんとなく自尊心を傷つけられたサイは頬を膨らませ、さっさと
任務を開始することにした。

「もついいわキリヤ、いくよ」

「ちよっと待ってくれよ、コイツの点検がまだ」

そう言いかけたキリヤ。

しかし黙ったサイの背中から怒りのオーラが漂ってきてやめた。
彼女を怒らせて生還できた日はない。

「えーとそれじゃ、いきますか？」

明らかな不信の目が突き刺さる。

特に、キリヤの背にある大型の剣に。

「コンニチワア、私たち商人ネ、この街で商売しに来たネ」

「そ、そうアルネ、オレは護衛アルネ」

サイとキリヤは何故か片言の言葉で、がちりと武装している門守に話しかけた。門守はさらに不信の眼差しを容赦なく二人に叩きつけた。

「それならその証拠にモノを見せてもらおうか？」

「もちろんアルネ」

サイが差し出したのは丈夫な革製の鞆バックパツク。

「なんだコレは」

門守は革鞆の中をまさぐり、拳大の鉄の塊を取り出した。ポタンがついていてそれを押してみようとすする。

「ちよい待ち！」

突然叫ぶサイ。

それに驚いた門守はポタンを押さずに済んだが、不信感を深めてしまったようだ。慌ててサイは説明する。

「ちょ、ちよつと待つてクダサーイ！ コレは『魔導具』アルネ！

お客サン、知らないアルカ？ 素人がコノぼたん押したら大変な

コトが起こるアルヨ」

「魔導具……これがそうなのか！ 話では聞いたことがあったが、確か古代帝国の遺産で現代科学も超越した、滅多にお目にかかれない代物らしいな」

門守はまじまじとその魔導具を見つめていた。

「そうそう、それをここの領主サンに売りに来たんだ……来たアル」

慌てて言い直すキリヤ。

しかし門守はもう彼らには興味を持っていないようだった。

「ふむ、これは領主さまも気に入るかも知れんな、よし通れ。よう

こそ、サウスムーンへ」

儀礼的な言葉と共に二人はまんまと街の中へ入り込む。

自然が街中にも残され石造りの屋根の低い建物が多く、文化水準

は並の下というところか。

行き交う人々は粗末な服に身を包み、表情に生氣はなく二人にも興味を示して来るものはなかった。それはこの国の領主に原因があるのを二人は知っていた。

しかし、帝国の眼も届かないような辺境にある国。やっと辿り付いたという感慨が湧いてくる。

「到着ね！」

「楽勝、楽勝」

と浮かれている二人だったが、背後からまた呼び止められる。

「ところで……どこかで会ったことないか？」

「はあ？ ねーよ、じゃなくて、ねーアルヨ」

すでに片言もどうでもよくなっているキリヤとサイの顔をまじまじと見つめる門守。さすがに気持ち悪くなり罵声の一つでも飛ばしてやろうかと思つた矢先。

「お、思い出した！ お前ら、帝国指名手配されてる双子だな！」

「げえっ、こんな辺境の国でも知られてんのかよ！？」

「まー今まで派手にやらかしたからねえ……」

などと戯れていると騒ぎを聞きつけた兵士たちが駆けつけてくる。気がつくのと統一した槍で武装し明らかに敵意を放つ彼らに包囲されてしまっていた。

「こうなったら強行突破アルネ！」

「それはもういいっつの！ キリヤ、前衛は任せたよ！」

サイはまず敵の数を数えた。

するといつのまにか十人を越す兵士たちが集っていたので眩暈を感じたが、なんとか気を取り直し背囊に手を伸ばす。

「うらあー！」

先手必勝とばかりに槍を掲げ突進してきた兵士。

即座に反応したキリヤは背にある剣の柄に手を伸ばす。だが。

「キリヤ！」

「チイツ、うるせえな」

サイの制止にキリヤは素直に剣を使うのをやめた。拳を固め、突進してくる兵士が迫ると同時に跳躍。容赦なく顔面に拳を叩き込み沈ませた。

「これでいいんだろ。次！」

キリヤは倒れた兵士の槍を奪い、手前にいた兵士の足を払った。

「うお！」

「このガキ！」

無様に転がされた兵士。

その隣のほうが無防備なキリヤに槍の鋭利な穂先を突き出す。

だが横手から飛んできた鉄塊が頬を砕き兵士を弾き飛ばした。そして鉄塊は再び飛んできた方向に戻っていくとサイの手の平に収まった。

「この魔導具、『飛燕』はボタンを押して起動すると自分の意思で自在に操れるようになるの。訓練がいるけどネ」

サイは微笑みながら得意気に語り、さらに『飛燕』を放り投げた。すると重力や慣性を無視した鉄塊は三人の兵士の顔面をことごとく潰し、サイの手に帰還した。

「……………つくづく恐ろしい女だぜ」

この女を敵にはするまいとキリヤは誓った。

しかし、並外れた戦闘力を披露した二人だったが兵士たちの包囲網にじりじりと追い込まれていく。

「そうか貴様ら、魔剣士というやつか……………しかし多勢に無勢という奴だな。大人しく投降すれば命はとらんぞ」

兵士の一人が余裕たつぷりに言った。刹那『飛燕』が彼の顔面をとんでもない状態にした。

魔剣士というのは魔導具や魔導兵器の扱いに長けた者が得る称号で、その戦闘力は一介の兵士の十人力倍はあり、戦などでは傭兵として高給で雇われたりしている。

「……………キリヤ、眼と耳閉じて！」

「おっ！」

二人が追いつめられたときの脱出パターンのひとつ。

サイが身につけていた首飾り型の魔導具『雷神』が発動し、そこから轟音と閃光が迸った。

耳をつんざく爆音。世界が白と黒に染まる。

その強烈な音と光の凄まじい衝撃に兵士は次々と倒れ、その隙に二人は飛び出しとにかく走った。

すると角を曲がったところで横から呼び止める幼い声がした。

「お姉ちゃんたち！ こっち！」

「え？」

見ると二人より幼い少年。

まるで案内をするかのように走り出したので後に続く。

何度も角を曲がってようやく行き着くと、人気がない通りにひっそりと佇む石造りの寂れた宿の前にたどり着く。看板の文字がかすんで読めない。

「もう、大丈夫だよ、ここなら、泊めてくれる」

息を弾ませながら、少年。

キリヤは信用していいものかとサイに視線を送る。サイは頷き、ゆっくりと宿へと足を向けた。

第二章【剣】

「領主様、街に賊が入ったとのことですよ」

キリヤたちの侵入はさっそく領主へと伝えられた。だが領主は興味なさそうに兵の言葉を無視し女と戯れている。

「領主様……」

甘ったるい香りが充満していた。

領主の間は明らかに無駄とわかるほどの豪華絢爛な装飾がされ高価な置物などがこれまた無駄に置かれていた。

その悪趣味な空間の中央にこの国の実権を握る醜い男がいた。すでに禿げ上がった頭は脂が浮き、全身にも脂肪が余分過ぎるほど蓄積されていた。

そんな男がベッドに横たわり、二人の女を両脇に抱き微睡んでいる。

「ええい、黙らんか。そんな賊などさっさと見つけどうとでもしろ。それよりも愚民どもからもっと税を徴収する努力をせんか努力を」

「……ハッ」

兵士は一瞬だけ瞳に敵意を宿したが、すぐにその場を去った。兵士は女たちが哀れでならなかった。

ベッドに横たわったキリヤは三秒で寝息をかきはじめた。

「つたく、この能天気は……ごめんね、リットくん」

「いえ、お役に立てられたらよかったです」

二人は少年の案内で宿に入れてもらった。

二階にある小さな個室に部屋を借りた。それなりに掃除はされて

いて問題はなさそうだ。

少年の名はリットと言った。

身なりも良く言葉も大人じみていてしっかりしている。サイは倍は年上のはずのキリヤのほうが子供に見えた。

「でも、どうして私たちを助けてくれたの？」

「それは……サイさんがあの兵士さんたちに追われて困っていたみたいですから」

リットは歯切れ悪く言った。

この子は何か隠している。サイは直感した。

するとリットは大きな黒い瞳を動かし、壁に立て掛けたキリヤの剣をちらちらと気にした。

「あの剣 気になる？」

「えっ、あ、その……さつき、兵士さんたちに囲まれていたのに、キリヤさんはどうして使わなかったんですか」

「ああ……あの剣、本当は剣じゃないんだよ」
「？」

サイは何故かはぐらかすように答えただけだった。

すると突然立ち上がり、何かを探している。

「どうしたんですか」

「喉渴いちゃって、受付に繋がる電話ないかしら」

そう言うのと部屋の角にある電話を見つけ、内線を押す。
しかし反応がない。

「あの、壊れてるみたいですね。僕が行ってきましょつか？」

「いいよ、ありがと。じゃちょっと行ってくるね」

サイはリットを安心させるように微笑んでから扉を閉めた。

しかしリットはサイの気配がなくなるのを待ってから、ゆっくりと立ち上がった。

巨大な何かが迫って来る。

「なん、だ……」

キリヤは重たい身体を引きずりそれから逃げよつとす。
しかしそれはあつという間にキリヤに追いつき、彼を踏み潰そうとする。

「キイリイヤアアア」

「うわあああ!？」

キリヤは飛び起き、辺りを見回す。

見慣れない部屋。

いや、リットとかいう少年に案内された安宿だ。

「ふう、夢か……. やたらでかいサイに潰されるなんて……

……悪夢だ」

「アンタ勝手に人を巨大化しないでくれない？」

いつのまにか扉のところにサイが立っていた。

何故か水を三人分、トナーに乗せて持っている。

「ん？ おお水か、気が利くじゃん」

そう言つてコップを取ろうとする。

するとサイは突然水を取るとキリヤに浴びせる。

「な、なにしゃがる!!」

「まったくこの能天気は……. リットくんは？ 剣は、どこ

!？」

ハツと冷静になったキリヤがその狭い部屋を探すとリットはおろ

か、あの大きな剣さえなくなっていた。

「まさか」

ようやく事態が見えたキリヤ。

するとまた水を顔面に浴びせられる。

「グズグズしない!」

二人は指名手配されているのも構わず街に飛び出した。

あの巨大な剣を持っているのだ。嫌でも目立つし重い。まだその
辺りにいるはずだ。

しかし、辺りを覗いながら走り回る彼らに人々は一瞬だけ眼を向

けただけで、それ以上興味を示してくるものはなかった。

他人に干渉しようとしないうちは、その余裕がないからだ、サイは哀しげに目を伏せた。

「まったく、剣を盗られるなんて社長になんて説明したらいいのか……アンタ、殺されるわ」

「ちょ、マジで社長には内密に！」

キリヤは情けないほど悲痛な叫びをあげた。

サイは無視して歎息し辺りを見回す。

すると通りの一角の薬屋で騒ぎが起こっているのを見つける。

「あれは……リットくん!?」

「なにしてんだあいつ」

サイは眼を疑った。

硝子のウィンドー越しに見えたのは、剣を振るえる手で掲げたりツトが薬屋の若い男の店員を脅している様子だった。

「やべえな、鞘から抜いてるじゃねえか」

床に剣の鞘が転がっているのを確認してキリヤは毒づいた。

そして薬屋に突入するため疾走する。

「キリヤ！」

サイが背後で叫ぶのも耳に入らなかった。

リットが精いっぱい力で掲げている剣。その刀身に彫られた印が不気味な輝きを発し鳴動し始めたからだ。

「やべえやべえやべえやべえやつべえッ!!!」

とにかく無我夢中でキリヤは走った。

店内に転がり込むと驚いたリットが剣を振ってしまい、その影響かついに刻印が閃光を迸らせた。刀身が光り輝き刃の形状が軟体生物のように奇妙に蠢いていた。

刹那。

轟音が鳴り響き閃光が弾け振動が全てを揺るがした。

「!!!」

恐怖に戦慄したリットはしかし見てしまった。

剣の刃はすでに原型を留めておらず何かに変貌を遂げようとしていた。ただ、業火の如く紅い邪悪な瞳と眼が合ったのを知った。

「間に合え！」

轟音と閃光と振動のなかキリヤはリットの堅く握りしめられた剣の柄をなんとかもぎ取り自分で握りしめた。

刹那　時が逆再生していくように、生まれ出ようとした何かは元の剣の刃に戻っていった。

一瞬の出来事だった。

何もかも幻だったのかのように静まっていた。

しかし静寂が訪れても、リットの網膜にはあの邪悪な紅い眼が焼きつき、茫然と立ち尽くしている。

「ふうー……」

キリヤは額に大量の脂汗を浮かべながら息を吐いた。

そしてゆっくりと床に落ちていた鞘を拾い剣を包み込んだ。

「動くな」

突然背中に鋭利な何かが当たるのに気付き、キリヤは観念した。

首だけ後ろに回すと、やはり兵士が槍を突きつけているのと、サ

イが自分を見捨てて逃げ去っているのがわかった。

「お前を連行する」

「ま、これだけ派手にやっちゃあね」

自嘲気味に笑うキリヤ。

元は薬屋だったはずのそこは容赦なく徹底的に破壊され瓦礫の山と化し原型を留めてはいなかった。

店員の若い男は壊れたように笑っていた。

第三章【再会】

青空は残酷にも清々しい。

サイは公園のブランコに座り揺れていた。

「懐かしいわー、あの頃は良かった……いち、にい、さん、しい」

流れる雲の数を数えながら思う。

などと現実逃避をしても何も変わらない。

これからすることを考える。

元々の任務だった、領主が所有しているという高等魔導具の回収
それは大事だ。ここまで来たのだから。任務に失敗したとなればあの社長が黙ってはいないだろう。

では次に、捕えられた哀れなキリヤは？ 当然後回し。最低置き
去りにする。だが、剣は？ きつと奪われたのだろう。あれも取り返さなければなるまい。

余計に任務の難易度が上がっている。

こんちくしょう、バカキリヤ！

「あーッもう、いくしかない」

サイは運命を呪いながらブランコから飛び降りた。

甘ったるい香り。

芳香によるそれは鼻の粘膜を刺激する。

「領主様！」

領主の側近は鼻が垂れそうになるのを必死に抑えながら言った。
どうもこの香りはアレルギーらしい。

「賊を捕えました！」

おそらく、お褒めの言葉でも欲していたのだろう。兵士から報告を受けた側近はその情報を自分から進呈しに赴いた。

しかし残念ながら領主は期待に添えなかった。

「そうか」

それだけ言うともまた女と戯れる。

「……………それと問題もございまして。ずっと、賊を捕えたのはいいのですが……………ずっと」

側近の男はたまらず懐から紙を取り出し鼻をかんだ。

「失礼しました……………ずっと様が……………」

「なんだと？ それはどういうことだ」

「どうやら……………ずっと……………らしいのです。それと」

報告を終えてやっと領主の間を後にした側近だが、不満そうな顔つきだった。

「まったく、あのハゲ。自分の子供よりあんな剣などに興味を示しおった……………ずっと」

側近は領主の子を思うと哀れでならなかった。

「……………ごめんなさい」

暗い牢獄のなか、キリヤが聞いたのは幼い少年の声だった。

ここは領主の屋敷にある牢獄。

そんな場所に似合わぬ幼い少年の声。

「僕は……………」

さらに続く言葉の前に、キリヤは口を開いた。「領主の息子なんだろ？ リット」

暗闇のなかにいるキリヤ。

彼は黒い天井を寝転がったまま見つめているだけだ。しかしリットの姿が見えないわけではない。何となく見当がついていた。あの身なりの良さも言葉が大人じみているのも納得できる。

牢の向こうにいるリットは黙った。それが肯定を示していた。

「それはいいんだ。確かに盗みや強盗なんてとんでもない犯罪だぜ。

「ただ剣をあんな無防備に置いていたのはオレだ。なんだかんだでお前も子供ってことさ。だから一番悪いのはオレ」

「……ごめんなさい」

再びリットは謝罪した。

その今にも消え入りそうな弱々しい声は、本当に深く反省しているのだとわかった。こうなってしまったのは自分の責任だと強く感じているのだ。

「なあ、どうして強盗なんかしたんだ？それが理解できない。お前は領主の息子で、金に困っているわけじゃないだろ」

キリヤは本当にそれが謎だった。

「僕は……薬がほしかったんです。いっぱい……いまこの国は、この国の人々は、僕の父の圧政で薬も買えないほど苦しいんです。重い税に病さえ治せない人々がいるのを……放って置けなかった」

「買えばいいじゃねえか」

「僕だってお金を自由に使えるわけじゃありません。父は、誰も信用していないんです……母も父を見捨てて僕を置いて去っていきました……父は、哀れな人なんです」

そして沈黙。

最後にリットは「ごめんなさい」と謝って去っていった。

一人残され、剣も奪われたキリヤ。

「サイ、助けに来るかなあ……」

正直わからなかった。

一人の美しい若き娘が領主の屋敷を訪れた。

「ん、お前は……そうか、領主様に奉公に来たのか」

「こんなべっぴんがああ醜い領主の手に……えげつねえ」

門守は勝手なことをいって娘を中へと迎え入れた。

屋敷はそれは広く、堀のある中庭を中心に部屋が並んでいる構造をしている。

なので、一見ではどれがなんの部屋なのかわかりにくい。

「一体どこに……」

「ん？ なにか言ったか？」

「い、いえ、おほほ」

誤魔化すように微笑む娘。

やっとのことで領主の間とやらに着いたようだ。

「領主様、新しく入った娘でございます」

「うむ」

返事とともに襖が開き、甘ったるい香りが漂う。

なんとも悪趣味な部屋の中央には大きな天蓋つきのベッドがあり、二人の女を両脇にした男が横になっているのがわかった。

しかし娘は領主にも眼をくれずとにかく部屋を見回し目的のものを探した。

あつた！ それはベッドの脇に無雑作に立て掛けられていた。

大きな剣。見間違いようがない、キリヤが奪われたのであろう剣。

「？」

しかし、よく見ると反対側にも同じ剣があるのに気付く。

同じ……？

「ようこそ、サウスムーン国領主こと、ウラガン・コンドウの間へ」

領主　ウラガンの顔を見た瞬間、娘の脳裏に電撃が走った。全身が痙攣したかのように震える。

「まさか……お前は」

「なに？」

ウラガンは娘の様子がおかしいのに気がつき、怪訝に眉根を寄せた。

まずい、コントロールが！ そう娘が心中で叫ぶが遅かった。ピクス型の魔導具『猫娘』の幻影効果が消滅し、娘の姿は刹那にして正体を表し、黒髪の長い幼い少女　サイになっていた。

「お前……！ 何者だ！？」

突然のことにウラガンは驚愕し、女たちを振り捨て慌てて傍らの

剣を手を取った。兵も慌てふためき応援を呼びに走る。

「フン、覚えていない？ だったら思い出させてあげる。その剣を私の両親から奪った盗賊め！」

「なッ」

サイはすかさず鞆から『飛燕』を取り出し起動した。鉄塊は弾かれたように激しく飛び出しウラガンに迫る。しかし。

『飛燕』はウラガンの眼前で、衝撃を受けたように弾け生命力を失ったように落下した。

「くっ……魔導干渉領域！」

それは、剣が高位魔導兵器である証拠でもあった。

高位魔導兵器は他の魔導具や魔導兵器の攻撃から使い手を守る障壁 強力な魔導干渉を与え力を打ち消す見えない領域を自動的に発生させる。それが魔導干渉領域。

「まったく！ 余計な機能つけてくれたものだわ！」

毒づくサイの横を裸の女たちが逃げていった。

そしてようやく思い出して合点がいったように、ウラガンは顔を歪めた。黒く淀んだ眼がサイを焦点に捕える。

「そうか……お前、ムラクモ家の娘か。さてはもう一人捕まった賊というのは息子のほうだな。それにしても大きくなったものだ」

「うるさい！」

男の胴間声を聞いているだけで鳥肌が立ちそうになり、サイはたまらず叫んだ。

そして新たに魔導具を取り出す。それは鈴型の魔導具『紫電』。彼女の持っているなかでもとっておきの強力な高位魔導具である。

「鈴なんかでどうする気だ？ 踊るか？」

ウラガンは嘲笑し明らかに油断していた。

「馬鹿ね。踊るのはアンタ」

サイは鈴を起動し凜と鳴らす。その刹那、電撃が鈴の音に重なるようにしてウラガンに向かって迸る。

「ぐおおお!?」

『紫電』の電撃は剣の魔導干渉領域を突破。

狙い通りウラガンに命中し肉体を灼いて全身に軽い火傷を負わせた。

だが『紫電』はコントロールが難しく、サイは命中させるために威力を抑えたので、致命傷を与えるまでにはいかなかった。

「き、貴様ア!」

「次は威力あげるわ。死ぬかもね」

サイは冷笑を浮かべ再び『紫電』を発動させる。

するとウラガンは咄嗟にベッドの反対側へと転がり込む。

その刹那、電撃がウラガンを追ってまっすぐ進む。だが 電撃

は命中する前に虚空へと消失した。

立ち上がったウラガンの手には、もう一振りの剣が新しく握られていた。

「そんな……二対の剣の領域が共鳴して、絶対魔導干渉を発生させている」

それはどんな強力な魔導具の影響も打ち消す強力な障壁。

いまサイの所持している魔導具を駆使してもそれを打ち破る破壊力は生み出すことができない。

「ふ、ふはははははは! どうやら打ち止めらしいな! では今度はこちらから、たっぷりと可愛がってやるぞ?」

ウラガンは嗤いながら二つの剣を振るった。

「ヤバイ」

サイはその剣の恐ろしさは知っている。

たとえそれが真の力を発揮していなくとも、とてつもなく脅威であろうことは変わりない。

突如、虚空に蒼く燃え盛る火球が生み出されまるで生きて意思を持っているかのようにサイを追って飛んで来る。

慌てて飛び退き距離をとるが、手前の床が急速に盛り上がり質量を増していく。すると木片や置物を無雑作に詰め合わせ身体を造っ

た巨大な怪物が顎を口開き、サイを飲み込むべく眼前に迫る。

二つの剣の殺戮的魔導効果。

眼を閉じ、一瞬駄目かと諦めたサイ。

「まだ！」

革靴から壺型の魔導具『風神』を取り出し起動。地面に向けて超圧縮された風圧を発射し反動で後方へ弾き飛ぶ。

着地がうまくゆかず庭を無様に転がってしまう。

だがウラガンの攻撃は避けることができた。間合いもある。咄嗟に立ち上がりそのまま背を向けて走り出す。

「待て！」

もう任務もどうでもいい。

とにかくキリヤを救出して生きてここから逃げよう。

サイはとにかく走った。

第四章【双龍】

「父さん！ おれも父さんみたいに剣を使いこなしてみせるよ！」
まだまだガキンチヨのオレがいる。
いまより、もつとだ。

父さんが手にしている巨大な剣を見つめている。
だけど父さんはオレには剣を触らせてはくれなかった。

「俺だつて完全にコイツの力を制御できてるわけじゃない。コイツは人の精神領域に侵入して初めて存在を得る事ができる。俺みたいになるには薄くなりコイツの力も弱くなる。ってわかるわけないか」
「わかるもん！」

いや、わかっちゃいなかった。

ある日、父さんの目を盗んで剣を手にしたんだ。
「う、うわあああ！！！」

なにかがオレを支配しようとするのがわかったよ。
ガキンチヨのただっぴろい精神領域に侵入したヤツは限りなく存在を得た。そしてソイツはオレは喰らおうとしていた。

そうすれば完全な存在を得ることができる……..
「キリヤ!？」

異変に気付いた父さんはなんとかオレを救い出してくれた。その時負った傷のせいでもう剣を使って戦うことはできなくなった。

だが父さんは怒らなかつた。

オレが無事であることを何よりも喜んでいた。

オレは自分がしたことを深く反省し、もう剣には触るまいと誓っ

た。

それから数月後、襲撃があった。

「ん………?」

キリヤは眼を覚ました。

夢を見ていたはずだが内容が思い出せない。

しかし過ごしてみれば暗闇の牢獄も涼しくて意外と心地よく……

……などとそんな現実逃避は通用しない。

「バイク………」

不意に青い空と平野を爆走していた爽快感が懐かしくなる。

オイル交換しなきゃなあ。などと無駄に呟く。

と　なにか音がしているのに気付いた。それに少し揺れている。

だんだん近づいてくるようだ。

「キイリイヤアアア!!」

と突然、かなりドスの利いた感じの呼び声と共にサイが牢の前に飛び出してきた。

「どうしたんだ、そんなに慌てて。服も汚れてボロボロじゃねえか」

いまいち事態が飲み込めずキリヤはぼんやりといった。

それが追い討ちをかけたのかサイは修羅の如き面構えでいきり立った。

「こんのツツノーテンキ単細胞ミラクルオバカ!!　とにかく出てきなさい!!」

「それが出ようにも出れなくって」

刹那、サイの起動した魔導兵器『獣王』の鋭利な鉤爪が、牢の鉄柵を紙を切るようにしてやすやすと引き裂いた。

「早く来い」

「はい」

これ以上怒らせたら本当に命はないと確信したキリヤだった。

それからとにかく二人は走った。

「ここの領主の息子、リットだったんだ」

「……………そう」 キリヤの新情報。

しかしサイは対して反応しなかった。もしかしたら薄々気付いていたのかもしれない。

「この領主、私たちの父さんと母さんの仇だった」

「……………なんだって!？」

突然のサイの新情報。

キリヤは驚愕のあまり足を止めてしまう。

「あの剣を持つてた。二対の一つをね。間違いないわ」

「……………」

それを聞いたキリヤは踵を返し来た道に戻ろうとする。

「ちよつと! いまの私達じゃ無理! アイツ、二本の剣を持つてるんだよ、殺されるのがオチ!」

「……………わりい、先行つてくれねえ?」

「!」

キリヤはそれだけ言うとはどンドン進んでいく。

絶対に勝てないとわかっているのに。

死に行くために。

「待てよ……………アンタまで死なれたら、私は……………」

「……………わりい」

キリヤはそれでも振り返らなかった。

立ち止まらなかった。 サイは立ち尽くしていた。

「くそ……………逃げ足の速い」

ウラガンは自分の屋敷内を両手に剣を持ってうろついていた。

自分の不甲斐ない部下たちが慌てふためいているのを完全に無視していた。

「父上」

幼い声に呼び止められ、ウラガンは振り返った。

そこには一人息子のリットがいた。

「もうお止めください。部下たちも貴方を恐れています。民も、貴

方を恐れています。もう、人を支配するのも、傷つけるのも……
・止めましょう。でなければ……」

ウラガンは右手に持った剣を振るった。巨大な刃は庭の固い土を深く抉り取った。しかしリットは怯まなかった。

「お前を育てたのは誰だ？ お前が着ている物も食べたものもこのワシの金があったからだろう。そのワシに意見するのか？ 刃向かうというのか？」

「それには感謝しています。僕は恵まれている。だけど……これっぽちも幸せだと思っただけではありません。僕の着ている物も食べた物も、病さえ治せない民から搾り取った金でできているのですから」

ウラガンは左手に持った剣を振るった。巨大な刃は庭に植えられた見事な松ノ木を数本同時に切断した。しかしリットは退かなかった。

「生意気な。ガキのくせに偉そうなことばかりぬかしやがって。そんなに望むならもうワシの子供でもなんでもない。自分一人の力で生きていけるといふのならそうしろ！」

「それはあんまりつてもんじゃないか、親父さん」
ウラガンが振り返るとキリヤが立っていた。いつかの光景と重なる。

「あの時のガキ。でかくなつたがその女子みてえな顔は相変わらずだな」

その時、雨雫がこぼれ突然の五月雨が降り注いだ。

キリヤもウラガンもリットも、濡れようが構わなかった。

「そんなことはどうでもいい。あんたが持っているその剣、名前を教えてやろう。左手に持っている天空の印が彫られた剣は『天龍剣』。右に持っている大地の印が彫られた剣は『地龍剣』。二つ揃って『絞龍剣』と総称する。高位魔導兵器の一つだ」

キリヤは何故か懐かしい気持ちになっていた。

二つの剣が揃っているのはあの父が生きていた頃以来なのだ。

キリヤは突然ウラガンに飛びかかった。不意を突かれたウラガンの右手 いや、『天龍剣』の柄にキリヤは手を伸ばしていた。

「何をやる気だ、放せ！」

「リット、『地龍剣』を解放させる！」

「な！」

ウラガンがキリヤに気をとられている隙に、リットはウラガンの左手に手を伸ばした。『地龍剣』の柄に触れる。

「さあ入って来い、本当の姿を見せる！」

念じると精神に何かが入り込んでくるのがわかる。

意識の片隅に自分のものではない、何か邪悪な意思が入ってくるという感じた。

そしてキリヤが触れている『天龍剣』と、リットが触れている『地龍剣』の刻印が鳴動し、唸る。

「な、んだ？」

そして閃光、轟音、振動、明滅 それぞれの刃が軟体生物のように奇妙に蠢いたかと思うと、それは何か形を成そうとしていた。そしてウラガンにもそれがなんなのか分かった。

真紅の邪悪なる瞳を持つ二頭の龍 現代では絶滅したとされる伝説上の生物、いや生物を越えた存在。

あまりにも巨大でありにも獰悪。

『天龍』は蒼い炎を迸らせ屋敷を無差別に焼いた。

『地龍』は激震を起こし屋敷を粉々に砕いた。

「や、やめろおお！」

世界の終焉が訪れたかのような壮絶なる光景だった。

屋敷にいた人々も各々退去してしまった。

もうすでにウラガンに戦意などなかった。

自分が手にして頼っていたのは凶悪な怪物だったのだ。

「リット、逃げろ！」

「え……でも」

「いいんだ。もうこいつらはほぼ存在を得ている。あとは 肉体

を喰らうのみ」

その意味は幼いリットにも理解できた。

具現化した双龍は互いに一つずつ肉体を喰らい完全なる存在を得ることができる。

ウラガンとキリヤ それぞれの肉体を双龍が視界に捕える。

「リット！」

「………」

「謝るな!!」

激震する大地にそれ以上留まれなくなりリットは振落とされた。

そして双龍はその巨大な顎を開く。

「これではないか」

ここまで具現化してしまっただけにはいかにキリヤでも制御することはできない。

しかしキリヤは何故だか恐怖を感じてはいなかった。

それは、龍の顎の向こう両親の幻影を見てしまったからだろうか。

「ぐうううう！ いやだあああ！」

ウラガンは暴れもがき逃げようとした。しかし龍の呪縛により剣を手放すことができない。

双龍が咆哮をあげ生贄を喰らうべく顎を開く

「ふうっ、間に合ったようだ。キリヤくん、いま助けるから」

それは突然の闖入者だった。

雨が降りしきり燃え盛る屋敷に激震する大地のなかで、余裕を見せるように微笑むその男。最上級階級の装飾がされた聖外套ホーリーローブを着ている。

「しゃ、社長!？」

キリヤは眼を疑った。

彼らの社長はここより遠く何千キロは離れた本社の社長室にいるはずなのだ。そのうえ滅多に本社から離れることはないというのに。

正確には離れられなのだが。

「高位魔導具を使って文字通り飛んできたのさ」

灰色の瞳をウィンクさせそう得意気に話し、初対面のリットとウラガンに向かつて帽子をとり白金の髪と共に恭しく頭を垂れる。

「挨拶が遅れました。私の名はレイ・ブラッドレス。魔導具及び魔導兵器回収を目的とする組織『アスラ』の取締役代表です」と、悠長に説明している場合ではなかったな。どれ」

双龍は獰悪な紅い瞳を輝かせ、名刺まで出そうとしていた軽薄な男　レイを睨みつけた。

レイは気を取り直し、ふざけているのか真面目にやっているのかおっかなびっくりという調子でおもむろに『天龍剣』と『地龍剣』に手を伸ばす。

「社長！」

すると突然、敵意を剥き出しに双龍は男を喰いちぎろうと迫る。

しかし間一髪、レイがそれぞれの剣に触れた刹那　空間が破裂するような音とともに、激しい旋風が吹き乱れた。

時間と空間が逆流するように龍達は剣の姿へと戻されていく。口惜しそうな龍の咆哮を虚空へと残して。

そして静寂。いつしか雨も上がっている。

剣はウラガンとキリヤの手から離れレイが持っていた。

「フウン。やはりな」

「ど、どういうことですか？」

キリヤはとにかくレイに食いついた。

殆ど完全体となった龍が元に戻るなんて、どんな仕掛けをしたのか。キリヤは夢でも見ているかと疑った。

「いやね、私には精神領域が全く存在しないんだ。全くね。新たに剣に触れた私の精神領域に反発し彼らは一気に剣へと逆戻り、というわけなんだね、たぶん」

「たぶん!？」

キリヤは叫んだ。

この尋常ではないような男が、やはりとんでもない異常であることを改めて思い知らされる。

「……………」

ウラガンはそんな彼らに構わず、座り込んでいた。剣を失い戦意もなくしたウラガンは、もうただの太った醜い男でしかない。

何もかもを失い、もはや茫然としている。するとリットは心配そうに駆け寄る。

「ち、父上！」

「……………リット」

たとえ見るに耐えないほど醜くとも、人々を苦しめる悪党だとしても、リットにとって唯一の肉親なのだ。

キリヤはその光景を眺めていると、ウラガンに対する殺しても殺し足りないほどの憎悪が消えてしまっているのに気付いた。

そこへサイが走ってやってくる。

「よかった、間に合って」

「私を呼んだのは彼女なんだ。通信用の魔導具を使ってね。感謝するなら彼女にしたまえ」

「サイ……………」

「キリヤ」

と言つて直後キリヤは殴り飛ばされた。さらに馬乗りになり首を絞められる。

「ぎえ！？」

「アンタ、私を残して死のうとしたわね！ わりい、で済むと思つたら大間違いよおお！」

「ま、って、そのまえに、マジにじ、ぬ……………」

天国が見え始め、割と寸前まで死にそうになったとき、レイが心配しはじめたのでやっとキリヤは解放された。

「つと、そろそろ私は戻らなくてはね」

「げほっ、げほっ……………も、もう行くんですか？」

そう言う割りに何故か嬉しそうなキリヤ。しかし。

「今回の数々の失態の責任はキリヤくん、君にすべてとってもらおう。本社に戻って来るのを楽しみにしてくれたまえ。おっと、剣は返そう」

「な」

なんとか抗議しようと口を開くキリヤ。しかし言うだけ言うと言いはさつさと背中に装着している鉄箱の形状をした謎の魔導具を起動し爆音と業火を噴射。瞬く間に空の彼方へと消えていた。

反動による爆風が吹き乱れ、また静寂が戻る。後には二つの剣

『天龍剣』と『地龍剣』が瓦礫の大地に突き刺さり残っていた。

「とりえあず、おつかれさま」

「ああ………」

全て終わったのだと安堵するサイ。

しかしやっぱり死んだほうがよかったかもしれないと、キリヤは思い悩んでいたのだがサイの手前それを言葉にすることはできなかつた。

青い雲は溶けて視界の後ろへと流れていく。

風を掻き分けながら、相変わらずの爆音で平野を蹂躪しながらキリヤとサイを乗せたバイクは猛突進していく。

二人は本社へと帰還するためサウスムーンを出発していた。キリヤの背には二つの剣。

無言の彼らの脳裏にはリットとウラガンの姿が浮かんでいた。

数分前、帰還する二人を崩壊した屋敷を後にして門のところまで、見送りに来たリット。

「もう行かれるんですか？」

「まあ私たちは指名手配されちゃってる身だし。コイツも今回の任務の失態を償わないとね」

サイが答えると、リットは急に俯き呟いた。

「……僕の父上が、お二人の仇だったなんて」

「気にするな。お前には関係のないことだしもうどうとも思っちゃいねえ。あんな風になっちゃ、仇を討つ気にもならねーって」

そう言うキリヤの言葉に、リットは父の姿を思い出す。

剣を失ったウラガンは抜け殻のように、無気力になってしまっていた。リットは、あの邪悪な眼をした龍が父の悪に染まった魂を喰い去ったのだと信じていた。だから、やり直せるかもしれないと信じている。

「もう、父は以前の父ではありません。だからきつと、自分の過ちを理解し罪を償う時が来ると僕は信じています。街の人々もいつかわかってくれるでしょう」

「ああ、お前ならできさ。 親父さんによろしくな」

少年はこの国の再建のために貢献するつもりだった。

黒い瞳にはしかし強い輝きが灯っている。リットは将来、きっとこの国の指導する立場になるだろうとキリヤとサイは確信していた。

「そろそろ行くわ。日が暮れるからね」

「そうですか……また来てください、その時にはきっと、もつと良い国になってますから！」

「ああ、また来るよ」

「じゃあね」

別れの挨拶もそこそこに、二人はバイクに跨り走り出した。

振り返ると名残惜しそうにリットが見送っていたが、その後ろにウラガンも立っているのが見えた。

リットが父の手をとって街へ帰っていくのをサイは微笑んで見送った。

黄昏に染まる街並み。

塔の群れは我先に天へと目指すように伸びている。要塞のような塔から這い出た人々は限りある時間を惜しむかのように鉄の塊に身を預け、渋滞を作り、線路を突き進み、海に浮かび、空を駆ける。

「こうやって夕陽に照らされた街並みを見ると、もう朝は来ないのかもしれないと案じてしまう」

聖外衣をまとった男は悲哀に満ちた眼で眼下の都市を壁に張られた硝子ごしに眺めている。

「社長……残念ですが明日は来ます。定例会議の打ち合わせと経費削減の見直し、協定へのスピーチの予行演習それから」

痩身の女秘書は社長 レイの背中に容赦なくまだ残っている仕事を、まくし立てるように報告した。

「……まあ、アレの解放は抑えることができた。まだ気付かれては困るからね それだけでも褒めて欲しいものだよ」

レイは恭しく言葉を紡ぎ、静かに振り返ると女秘書は日程帳と口

を開いた。

「では明日、定例会議の打ち合わせを行いますのでまた逃げないでください。スピーチの練習も自宅で怠らないように。では、定刻になりましたので失礼させて頂きます」

秘書は愛想もなく、高価な香水の香りを残し、さっさと社長室を後にした。あれでも仕事が完璧なのでレイも頭が上がらない。

「……さてと、しばらく休暇でもとるかな」

レイは光沢があり高級感漂う重厚な木製造りの机の下に隠してあった飛翔魔導具を拾った。しかしいつの間にか『休暇は許可できません』と書かれた紙が貼られていた。

「父親か……」

キリヤは小さく呟き、サイには聞こえなかった。

「母さん……」

サイは細く呟き、キリヤには聞こえなかった。

二人の感傷を振り払うように、アクセルを吹かしさらに速度をあげ差し迫る夕暮に向かってバイクは駆けていく。

「……ん？」

キリヤは眉根を寄せた。

爆音を轟かせ走るバイクに微かな変化を感じたのだ。すると徐々に速度が落ち、バイクはついに停まってしまふ。

「どうしたのよ」

サイに促され、キリヤはエンジンを始動させるが嫌がるように唸るだけでバイクは走ってくれない。

そしてやっとキリヤは思い出す。

「オイル交換、してねーや」

「はあ？ なにそれ」

星空の真下、二人は平野の真ん中に残された。静かになった平原に鈴虫の囁きと、遠くで野犬の遠吠えが聞こえた。

「どーすんのよ」

「……通信で社長、呼んで」

キリヤは満天の星空を仰いで嘆いた。

無責任な蒼い満月は高い所で愉快そうに、いつまでも二人を眺めていた。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1640a/>

Dragon Blade - 蒼の月 -

2008年11月7日07時03分発行